

瞬間芸能 舞台芸術の世界

～社会とのつながり、そして人間的成長

劇団きづがわ

取材に行くと丁度、6月20日、21日公演、「東の風が吹くとき」の稽古の真っ最中でした。劇団長であり、舞台演出家でもある林田時夫氏を中心に、劇団員の方々が迫力ある稽古をされていました。劇団員の方々はそれぞれの仕事を終わった土曜日の夕刻から稽古場に集まります。毎回、手作業で舞台セットを組みあげる公演は、劇団員の熱い想いに支えられています。

劇団きづがわは2013年創立50周年を迎えました。1963年に南大阪演劇研究会として発足し、4年後1967年に劇団きづがわと名称が変わります。演劇はよるこんだり、悲しんだり見る側の心が動く瞬間芸術です。劇団きづがわは、現代社会の問題やその人に起こった出来事や心の動きをリアルに表現する舞台をつくり続けています。

劇団代表の林田時夫氏は演劇の魅力は舞台で心から良かったと称賛を得ることで劇団員として大きく成長し、何より人と

して充実感、達成感を実感できることだと話します。現在の中心になっているのは舞台芸術華やかな1980年代に活躍した劇団員達です。

1980年代以降は、社会の働く環境の変化や全国の学校などでの演劇鑑賞が少なくなったこともあり、若者の演劇離れが進み、私たちの劇団だけではなく、多くの劇団でも、課題になっています。

現在、稽古中の「東の風が吹くとき」では、福島原発事故後、わが子同様に丹精込めて育てていた牛を処分される老夫婦や、1ターン若者酪農家の姿を描きます。作品では原発反対アピールとして描かれているのではなく、故郷、そして酪農業をこよなく愛する老夫婦を通して、改めて人間も自然とともに生きる存在であることを描いています。福島で起こっていることが何を意味するのか作り手と見る側で改めて共に考えたいと思います。

(文：事務局員 坂 信芳)



代表 林田 時夫 氏 (前列左より4番目)

◆会社概要◆所在地：大阪市大正区泉尾／資本金：100万円／創立：1963年／社員数：3名、劇団員20名／事業内容：演劇公演

木製リコーダー、温故知新!

～自社製品の奥深さの追求と新しい挑戦

竹山木管楽器製作所

私たちの手に触れるリコーダーの大半はプラスチック製です。しかし、リコーダーは本来、木製です。その木製リコーダーを製造販売している会社が、今回の取材先、竹山木管楽器製作所です。55年ほど前、当時木製ボビンを製造していた同社は、楽器商社から依頼を受け、木製リコーダーの製造を始めました。当時まとまった数を製造している業者が無かったため、量産するための機械も独自で製造しました。

同社は、リコーダーの研究のため、300～400年前のリコーダーのパーツの長さや内径などを細かく計測しました。木製リコーダーはまっすぐに見えますが、内径は微妙に曲線になっています。それは、当時の製作者が音色にこだわった現れです。製作者ごとに曲線は違うので、一本一本丁寧に計測し、再現していききました。

木製リコーダーは、木材の種類によって出る音色が違います。そのため、演奏会場や演奏形態に合わせて、リコーダーを使い分けれます。また、昔は地域や作曲された時代によって、音の高さに違いがありまし

た。それらに対応するため、現在では、大変多くの種類の木製リコーダーが製造されています。

さて、この市場は大変ニッチです。製作者と演奏者との距離が非常に近く、竹山氏自身も演奏者とのコミュニケーションを重要視し、リコーダーの音色に反映させています。また、製作者同士での意見交換、情報交換が頻繁に行われていることも業界の特徴です。

木材の値段の高騰やワシントン条約による輸入禁止を受け、従来の材料が手に入りにくくなっています。そこで、同社は新しい種類の木材での加工に果敢に挑戦しています。また、直営店ではコンサートやリコーダー製作教室を開催し、木製リコーダーの魅力を発信し続け、今ではアジア圏内にも広がっています。製作者の育成から一般の方々への普及まで、木製リコーダーの魅力を発信し続けることに邁進されています。

(文：事務局員 阪口 侑)



代表 竹山 宏之 氏



Photo: Toru Fujishima

◆会社概要◆所在地：大阪市住之江区／設立：1951年／従業員数：7名／事業内容：木製リコーダーの開発・製造・販売